

岡崎における第三者敬語の位置づけ：「第三者尊敬表現」，「第三者謙讓表現」各場面のデータを中心に

著者	辻 加代子, 井上 史雄, 柳村 裕
雑誌名	国立国語研究所論集
号	11
ページ	147-166
発行年	2016-07
URL	http://doi.org/10.15084/00000845

岡崎における第三者敬語の位置づけ

——「第三者尊敬表現」, 「第三者謙讓表現」各場面のデータを中心に——

辻 加代子^a 井上史雄^b 柳村 裕^c

^a神戸学院大学 / 国立国語研究所 共同研究員

^b東京外国語大学 名誉教授 / 国立国語研究所 時空間変異研究系 客員教授

^c国立国語研究所 時空間変異研究系 非常勤研究員

要旨

本稿は、2008年に実施された第3次岡崎敬語調査から新たに追加された第三者尊敬表現と第三者謙讓表現に関する設問に対する回答のデータに焦点をあて、岡崎市における第三者敬語の位置づけについて分析・検討したものである。その結果以下のようなことが明らかになった。

岡崎市における敬語体系自体がどの段階にあるか、という観点から見ると以下のようである。

(1) 目上の人物である先生を話題にして、対友人場面で尊敬語を使わず、対先生場面で尊敬語を使うという回答が多数を占めた。世代別に見ると、若い世代にかけてこの傾向が強まる。男性の方が女性よりこの傾向が強く、女性に一步先んじてこのような運用となっている。この結果から、見かけ時間の変化ではあるが、尊敬語の対者敬語的使用(敬語体系全体の丁寧語化)への変化が進んでいると言える。ただし、話し相手と話題ともに上位者を設定した場面では、回答が分かれ、話題と話し相手との関係も考慮した回答が一定数認められた。これは相対敬語的用法と言える。

(2) 「第三者謙讓表現」場面のデータには、他人を話し相手として身内の父親に言及する際、尊敬語使用はごく少数しか認められなかった。この結果から身内尊敬用法がほとんど行われていないことがわかった。第1次調査の別の項目の結果からは身内尊敬用法がかなり行われていることが認められるので、この点でも変化が認められることになる。

岡崎市の敬語の地理的位置づけ、という観点から見ると以下のようである。

(3) 敬語の運用上の特徴は、西日本的とされる、身内尊敬用法のような、絶対敬語的運用を残す運用や、くだけた場面でも素材敬語が高頻度で用いられるという運用は衰退し、東日本的な敬語体系全体の丁寧語化のような運用に変わりつつある。

また、尊敬語伝統形の衰退のような語形の変化よりも、丁寧語化のような運用の変化が遅れていることもわかった*。

キーワード: 第三者敬語, 尊敬語, 謙讓語, 敬語体系全体の丁寧語化, 相対敬語的運用

1. はじめに

本稿では、愛知県岡崎市で行われた敬語と敬語意識に関する大規模経年調査(以下、岡崎敬語調査と呼ぶ)のうち、2008年に実施された第3次調査から新たに調査項目に加えられた第三者敬語に関わる項目の調査結果に焦点をあてて、分析・考察したことについて報告する。

*本研究は、2015年3月8日に国立国語研究所で行われた「平成26年度 大規模経年調査プロジェクト共同研究発表会」での口頭発表の内容に加筆・修正したものである。本研究は、平成19(2007)年度～平成21(2009)年度 文部科学省科学研究費補助金[基盤研究(A) 課題番号:19202014, 研究代表者:杉戸清樹]の成果の一部であり、科研費報告書および関係者に配布されたCDを資料とした。また、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」(プロジェクトリーダー:井上史雄, 平成24年度～)の研究成果でもある。発表の場において貴重なご助言を賜った皆さま、投稿の過程において貴重なコメントを賜った先生に心より御礼申し上げます。

第三者敬語というのは、会話の当事者である話し手と話し相手以外の、話題の人物（第三者）に言及する際に用いられる敬語のことである。話者は第三者に言及するとき、話者自身と第三者との関係、話者自身と話し相手との関係、話し相手と第三者との関係を考慮して、適切な待遇表現を選ぶことになる。ただし、これら三つの関係のどれを重視するか、関係そのものを相対的に捉えるか否か、地位や身分などを絶対的基準として捉えるか否か、についてなどは、言語や方言により、あるいは時代により異なる。例えば、日本語の敬語運用上の変化として、絶対敬語から相対敬語への変化（金田一 1959）、さらには「敬語体系全体の丁寧語化」（井上 1981, 2011）のような議論は、この第三者敬語の用法と関係したものである。

また、現代の日本語では、第三者敬語と、話し相手への直接的配慮を表す敬語（以下、聞き手敬語と呼ぶ）とで、用いられる敬語語彙にも異なりがある。一般に狭義敬語のうち尊敬語は第三者敬語に用いられ、丁寧語は聞き手敬語に特化して用いられる。さらに、話し手側に属する第三者を主語とする場合、狭義謙讓語が用いられる。これは、話し手側に属する第三者への尊敬語の使用制限とともに、相対敬語的運用を構成することになる。

話し相手への配慮は、丁寧語使用の他にも、終助詞を使い分けたり、推量表現などにより婉曲に言ったりなどして、敬語以外の言語項目を用いて表されることもある。3次にわたる岡崎敬語調査の主眼は、言語行動を狭義敬語だけでなく、幅広い言語項目に視野を広げて、話し相手への配慮の言語化の様相を総合的にかつ通時的に見ることだった。

第三者敬語の項目は第3次調査で新たに追加された。第1次調査（1953年）は話し相手によって敬語がどう変わるかを見ようとするものだった。のちに出るポライトネス理論と同じような立場、発想である（Brown and Levinson 1987 [1978]）。しかし東アジアタイプの敬語（井上 2011: 316, 320, 321）は、話題の人物、第三者に向けても使われる。というよりもそもそも話題の人物向けの敬語、言及敬語 referent honorifics で、対象者が偶然その場にいるときに、対者敬語¹、呼びかけ敬語 addressee honorifics の役を果たすと考えるほうがいい。ただし現代日本語では第三者敬語の用法が変化して、話題の第三者よりは、面前の対者への敬語（つまりは丁寧語と連動する用法）となっている。これは現代敬語の性格変化を典型的に示すものなので、岡崎敬語調査でも入れたら面白いだろう。

岡崎敬語調査実施前の打合せ会におけるこの趣旨の発言がきっかけで、筆者、井上が各地のグロットグラム調査や鶴岡市近郊で行った調査の項目（の一部）が岡崎敬語調査に盛り込まれた。なお同一項目の東海道沿線グロットグラムの調査²結果は、報告書（井上 1991: 161）に収録して

¹「対者敬語」という用語を用いた研究者として辻村敏樹が挙げられる。辻村（1963）では、敬語分類案に「素材敬語」と同様に「対者敬語」を立てている。そして、「表現受容者（対者）に対する表現主体の慎しみの気持ちを直接に表わす」と定義し、「です。ます。候ふ等」を例として挙げている。なお、「素材敬語」は辻村（1963）では、「表現素材に関する敬語」と定義されており、尊敬語や謙讓語はここに属するとされる。

²東海道沿線グロットグラム調査（井上 1991）で用いられた設問は以下のようのものであった。

QK5 40代の中学校の先生の鈴木先生に会って、「校長先生は今学校にいるか」ということをきくとします。そんな時には「いるか」ということをどういいますか？

QK6 逆に校長先生に会って、「鈴木先生は今学校にいるか」をきくとすると、「いるか」はどういいますか？

以上は、第3次岡崎敬語調査の場面 115、場面 116、それぞれの設問にほぼ等しい。

ある。調査文や挿し絵は2場面に関して共通である。

本稿の表題で「位置づけ」の語を用いたのは二つの意味合いがある。

一つは体系的な位置づけである。岡崎市の話者は、実際、第三者をどのような敬語を用いて待遇していて、それは話し相手によりどのように変化するか、さらに、同じ人物に言及する場合、話し相手として待遇する場合と、第三者として待遇する場合とで、用いる敬語表現にどのような違いがあるかということである。そうすることにより、当地の敬語運用がどのような類型に属するか明らかにできよう。

もう一つは、地理的な位置づけである。当地の敬語運用が全国的に見てどのように位置づけられるか、ということである。井上(1981)では、全国の広い地域で「素材敬語の対者敬語的使用」、ないし、「敬語体系全体の丁寧語化」が認められるとしている。一方、宮治(1987)では、近畿中央部では、「面と向かって話す場合よりも、第三者として話題にする場合に素材待遇語³が多用される」運用が見られること、第三者待遇にほぼ限定される形で用いられる素材待遇語が上向き待遇の表現としても下向き待遇の表現としても存在することを報告している。さらに、ハル敬語を使用する京都市方言、特に女性話者では素材待遇語がこの一つの形に収斂^{れん}し、適用対象が間柄的關係にある人物だけでなく、不特定の人にも及んでいる(辻2009)。岡崎市方言は西三河方言域に属し、その西三河方言はかつて中央語だった近畿方言の敬語の勢力が波及した東端に近い場所に位置する(彦坂1991)。その影響について語形や運用の面から確認しておく必要がある。また、加藤(1973)では、近畿をはじめ西日本で他人に向かって家族のことを話す場合、尊敬表現を用いる「身内尊敬用法」が行われているとしているが、その点についてはどうであろうか。

以上のことを明らかにしていくことが本稿の目的である。

2. 分析方法

本節では、本研究の分析対象と分析方法について説明する。

2.1 分析する場面とデータ

本稿では、岡崎敬語調査の中心部分をなす敬語行動に関する面接調査の質問項目(100番台の質問項目)のうち、第3次岡崎調査で追加された第三者尊敬表現を問う場面115～117、第三者謙讓表現を問う場面118、第2次調査から加わった対者場面である場面114に対する反応文のデータを、主たる分析対象とする。これらの場面では、他の場面と異なり、いわゆる標準語翻訳方式の設問となっている。以下に各場面の調査文を示す。〔 〕内は場面の略称。

◇分析対象場面と調査文(下に記す番号は第3次調査のもの)

114〔先生の絵〕(第2次調査では115番)

尊敬している先生にむかっていう時のことばについておたずねします。「この絵は先生がかいた

³ 宮治(1987)では、素材待遇語を「広義の素材敬語」と説明し、上向き待遇の表現と下向き待遇の表現を含む用語として用いている。

のか」とたずねる時、ふつう何と言いますか。

115〔第三者__尊敬表現【話し手<話し相手<話題の人物】〕

あなたが40代の中学校の先生、鈴木先生に会って「校長先生は今学校にいるか」ということを聞くとします。そんな時には「いるか」ということをどう言いますか。

116〔第三者__尊敬表現【話し手<話し相手>話題の人物】〕

逆に、校長先生に会って「鈴木先生は今学校にいるか」を聞くとすると、「いるか」はどう言いますか。

117〔第三者__尊敬表現【話し手=話し相手<話題の人物】〕

では、友人に「鈴木先生は今学校にいるか」を聞くとすると、「いるか」はどう言いますか。

118〔第三者__謙譲表現〕

この土地の目上の方が訪ねてきました。その人にむかって、非常に丁寧に「私の父はすぐ来ますから、ちょっと待ってください」と言うとき、「すぐ来ますから」のところをどう言いますか。

場面 118 の調査文は、『方言文法全国地図』第6集〔表現法編3 (待遇)〕(国立国語研究所編 2006) の315 図と 316 図の文言と同じであり、他人に対して、身内の目上の人物を話題にする場合の、待遇表現の選択を確認する設問である。もし、謙譲語が選ばれば、相対敬語的運用が行われていることになるし、尊敬語が選ばれば、絶対敬語的運用、ないし、身内尊敬用法が行われていることになる。

この身内尊敬用法に関しては、場面 113〔市役所〕についても補足的に分析する。これは、父親が市役所に行けと言ったので、今行くところだということを、目上の人に答える、という場面である。場面 113 については、第1次から第3次調査にかけてのデータを分析した。

サンプルに関しては、ランダム・サンプリングによる継続調査サンプル(トレンド・サンプル)のみを対象とした。また、第1次調査については、プロパー・グループ(Proper Group; 研究者が調査した被調査者)とコントロール・グループ(Control Group; 学生が調査した被調査者)の両方のサンプルを対象とした。

2.2 分析方法

場面 114～117 に関しては、下に示す二通りの方法で分類、集計した。

まず、反応文に出現した敬語形式を、大づかみに捉えるため、尊敬語ないし謙譲語類(以上素材敬語)を使うかと、丁寧語、丁寧語4類(以上対者敬語)を使うか、という概略二段階の観点に

⁴ ここでの「丁寧語」の用語は、デゴザイマスに限定的に指す用語として用いることとする。デゴザイマスは丁寧語デス・マスよりさらに丁寧な、「上級の丁寧表現」(加藤 1973)として使われる形式である。

敬語研究での用語としての「丁寧語」は、宮地(1971: 284)では「話題のものごとの表現をとおして、話し手が聞き手への配慮をしめす敬語」だとされている。その所属語としては、現代語に関しては、「ござる」の他にも、丁寧語マスを必ず伴って使われる「いたす・存じる・まいる」などが挙げられており、本稿より広い概念を示す用語として用いられている。それは菊地(1994)でいう謙譲語 B(後の版では「謙譲語 II」)にはほぼ重なる。

より分類した。《敬語大分類》とする。

次に反応文の述部に現れた広義素材敬語について、敬語形式毎に分類した。《敬語形式別分類》とする⁵。

◇分析方法

上の二通りの分類により場面毎の使用実態を分析した。

さらに、必要に応じて世代別（10年刻み）、性別に分けて使用実態を分析した。

3. 第三者敬語使用の実態

本節では、第三者敬語に関わる使用実態を、運用面、および、使用された尊敬語語彙の面から分析し、その結果を示しながら考察する。

具体的には、3.1～3.4では第三者尊敬表現について検討する。3.1で、《敬語大分類》による分析結果を示し、3.2で《敬語形式別分類》による場面間比較を示し、3.3で《敬語形式別分類》による場面別、属性別分析から得られた個別敬語形式の特徴について検討し、3.4で個人毎の敬語運用について検討し、3.5で第三者謙讓表現について検討する。

3.1 敬語大分類による集計結果—第三者尊敬表現—

第3次調査における「第三者__尊敬表現」場面（場面115～117）の集計結果（敬語大分類による）を表1に示した。表1では、話し相手への待遇の仕方を問う場面114〔先生の絵〕も参考として示した。この場面は他とは設問そのものも、焦点をあてた動詞（「いる」v.s.「かく」）も異なるが、質問の形の回答を要求している点で共通点があり、主語に「尊敬する先生」をとる点は、場面115や場面116に近いので、比較になると考えたためである。

なお、丁寧語に関しては、動詞に直接続く場合だけでなく、助詞「の」「ん」を介して続く場合や、名詞を介して続く場合もカウントした。

（例）イラッサシャルンデスカ・オルンデスカ

⁵ 回答には、以上に分類した他にも、下に例示するような相手への配慮を表す表現も現れていたが、第三者敬語に焦点をあてて分析するという本稿の目的を考えると、詳しくは触れないこととする。

丁寧語が二重に使われ、かつ推量形も使われている例：イラッサチャイマスデショーカー

丁寧語と推量形が使われている例：オラレルデショーカー

表1 第三者尊敬表現に関わる場面比較《敬語大分類による》

(セル内の数字は使用数。表3～13についても同様)

敬語形式 (敬語大分類による)	115. 第三者__尊敬表現 【話し手<話し相手< 話題の人物】	116. 第三者__尊敬表現 【話し手<話し相手> 話題の人物】	117. 第三者__尊敬表現 【話し手=話し相手< 話題の人物】	114 先生の絵 《参考》
尊敬語+丁寧語	0	0	0	1
尊敬語+丁寧語	275	238	45	252
尊敬語+ス	1	0	0	1
尊敬語	5	4	45	0
V+丁寧語	22	53	39	34
N+丁寧語	0	1	0	0
V+ス	0	0	0	2
V	1	2	169	7
N	0	0	1	0
NR ¹	2	8	7	9
合計	306	306	306	306

凡例 V: 敬語なしの動詞 (表9についても同様) N: 名詞 (句)

1: NR (No response.) の他, DK (Don't know.), 不明, 設問に対応していない回答なども含む。

集計結果を見ると以下のことが言える。

- (1) 第三者尊敬表現について見ると、尊敬語と丁寧語の両方を用いた回答が、校長先生を話題とし、40代の鈴木先生を話し相手とした場面115【話し手<話し相手<話題の人物】と、鈴木先生を話題とし、校長先生を話し相手とした場面116【話し手<話し相手>話題の人物】の2場面で極めて多く、とりわけ場面115が275例(89.9%)と多い。
- (2) 尊敬語だけ用いるとする回答は、鈴木先生を話題とし、友人を話し相手とする場面117【話し手=話し相手<話題の人物】に多く(45例14.7%)見られる。他の場面では、0～5例でごく少ない。
- (3) 丁寧語だけを使用するという回答は、場面116に多く(53例17.3%)、場面117、場面115と続く。
- (4) 敬語を一切使わないという回答(表1でVとNに分類した回答)は、場面117で最も多く(170例55.5%)、他の場面ではその数は極めて少ない。
- (5) 話し相手を「尊敬する先生」とする設問の場面114【先生の絵】について見ると、尊敬語と丁寧語の両方を用いた回答は、場面115と場面116とのほぼ中間程度である。丁寧語だけを使用するという回答は場面117と同程度である。
- (6) 丁寧語は場面114で1例のみ用いられている。

以上より、データを一つのまとまりとして見ると次のようなことが言える。

まず、「第三者__尊敬表現」3場面を比較すると、場面115【話し手<話し相手<話題の人物】で最も丁寧な言い方となる。場面115と場面116【話し手<話し相手>話題の人物】に関する限り、僅かの差ではあるが、第三者の方が話し相手より尊敬語の選択に強く関与していると言える。

次に、場面117【話し手=話し相手<話題の人物】の場合、先生を話題にしても敬語をまった

く使用しないとする回答が過半数である一方で、尊敬語を使用する回答が90例、約3割ある。「敬語体系全体の丁寧語化」との関連で考えれば過半数がその変化に該当する可能性がある。その一方で、尊敬語を使用するとする回答が約3割あるということは丁寧語化が認められない話者も一定数あることを示唆する。

さらに、第三者場面である場面115、場面116、および対者場面である場面114の3場面を比較すると、「校長先生（話題）」＞「尊敬する先生（話し相手＝話題）」＞「鈴木先生（話題）」という順で丁寧な言い方になっており、話題の人物間の序列を投影しているようにみえる。

以上は、データを一つのまとまりとして考察した結果であるが、回答者の属性の違いが回答を左右していることも考えられる。

運用の問題、特に「敬語体系全体の丁寧語化」という変化と関わる現象を考えるためには、友人を話し相手とするくだけた場面である場面117のデータを、回答者の年齢と関係づけて分析する必要がある。

図1に、NR（反応なしのような回答）を除いた有効回答を、尊敬語の使用と、不使用という観点で分類し、世代別に分けて集計した結果を示す。縦軸は人数を示す（次頁の表2参照）。「尊敬語不使用」には丁寧語だけを使うという回答も含めて集計してある。なお、丁寧語だけを使用すると答えた回答者は20代以上の世代にまんべんなく分布しており、20代を除いて男性に多い。その内訳は20代5名、30代6名、40代11名、50代9名、60代4名、70代4名であった。）

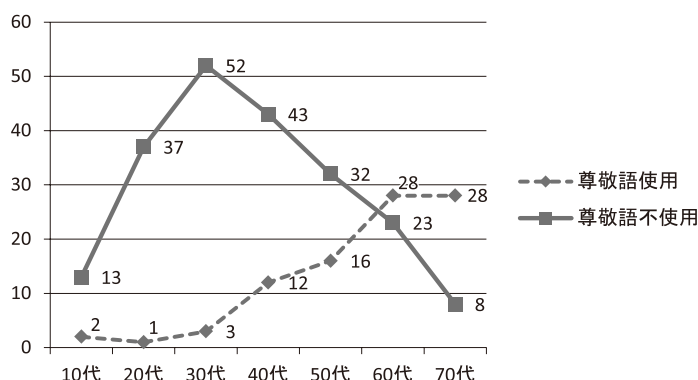


図1 場面117〔第三者_尊敬表現【話し手＝話し相手<話題の人物】〕
世代別尊敬語使用状況

図1からは60代から50代の世代の間で尊敬語使用優勢から不使用優勢に転じ、若い世代に向けて不使用とする回答がどんどん増えていることがわかる。

また、30代以下の世代は鈴木先生を話題にしてほとんど尊敬語を使用しないと回答していることがわかった。

以上により、「見かけ時間の変化（apparent-time change）」（Chambers 1995）ではあるが、「敬語体系全体の丁寧語化」の変化が浸透している可能性のあることがわかった。

次に、世代別に性別を加えてクロス集計した結果を表2と図2に示す。

表2 場面 117【話し手=話し相手<話題の人物】 世代別×性別尊敬語使用状況 (数字は人数)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
尊敬語使用 (全体)	2	1	3	12	16	28	28
尊敬語使用 (男性)	0	0	1	1	4	8	10
尊敬語使用 (女性)	2	1	2	11	12	20	18
尊敬語不使用 (全体)	13	37	52	43	32	23	8
尊敬語不使用 (男性)	8	23	29	26	17	21	8
尊敬語不使用 (女性)	5	14	23	17	15	2	0
小計	15	38	55	55	48	51	36

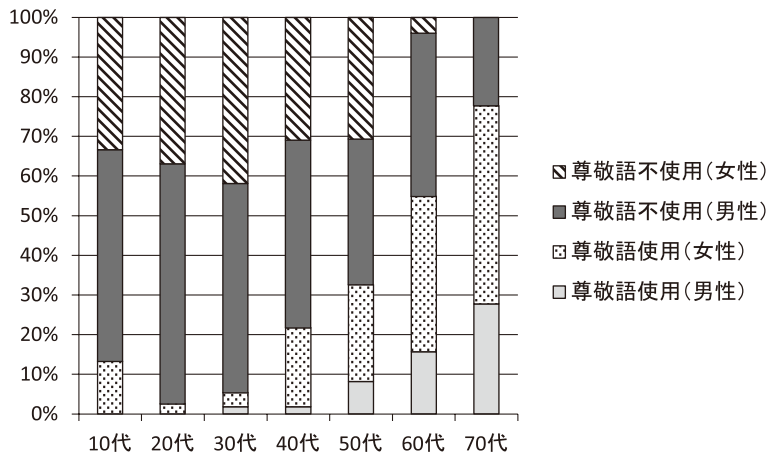


図2 場面 117【話し手=話し相手<話題の人物】 世代別×性別尊敬語使用状況

表2と図2を見ると以下のことがわかる。

- (1) 尊敬語を使用しないとする回答は、70代では女性が0%、男性が20%強であったが、世代が低くなるに従ってさらに増加し、20代ではほぼ全員が使用しないという回答であった。
- (2) 尊敬語を使用するとする回答は、高齢層に多く、若い人でほぼなくなる。男性では早くも40代でほぼなくなるのに、女性は30代になってかなり減少し、20代でほぼ0%となっている。

以上から女性の敬語使用の多さがうかがえる。場面 117で尊敬語を使用するという回答がなくなる時期は、男性が早く、女性がそれに遅れる。ただし、尊敬語を使用するという回答がなくなるということは、「敬語体系の丁寧語化」の変化を強く示唆するが、変化そのものではない。それを検証するためには、回答者毎の運用をさらに確認する必要がある。その点については3.4でさらに検討する。

3.2 尊敬語形式分類の結果

調査で回答された場面 115～117の敬語形式別の集計結果を表3に示す。

表3 第三者尊敬表現に関わる場面比較《敬語形式別分類による》

敬語形式 (敬語形式別分類による)	115. 第三者_尊敬表現【話し手<話し相手<話題の人物】	116. 第三者_尊敬表現【話し手<話し相手>話題の人物】	117. 第三者_尊敬表現【話し手=話し相手<話題の人物】	114 先生の絵 《参考》
オミエニナラレル (三重敬語)	2	1	0	/
イラッシャラレル (二重敬語)	2	1	0	/
オイデニナラレル (二重敬語)	1	0	0	0
オ～ニナラレル (二重敬語)	/	/	/	32
オミエニナル (二重敬語)	29	27	3	/
イラッシャル	172	126	34	/
オイデニナル	5	5	1	/
オ～ニナル	/	/	/	131
オイデダ	4	1	0	/
御+漢語 ¹	4	2	0	0
オミエダ	9	7	2	/
オイデル	2	0	4	/
ミエラレル (二重敬語)	0	1	0	/
ミエル	28	47	43	1
レル	23	24	3	90
φ	23	56	208	43
NR ²	2	8	8	9
合計	306	306	306	306

凡例

/: 該当する尊敬語がないものを「/」で示した。φ: 動詞のみ (表4～7, 10～13, 図3についても同様)

1: ご在宅・御在籍・御校務中 (表4, 5についても同様)

2: NRの他, DK, 名詞のみの回答なども含む。(表4～7についても同様)

表3より形式毎に集計結果を見ていこう。

(1) 二重敬語, 三重敬語の類が多数現れた。この「二重敬語」「三重敬語」の定義に関してまず説明しておく, ミエルが独立した敬語なので, オミエニナル, ミエラレルは二重敬語として分類し, オミエニナラレルは三重敬語として分類した。イラッシャラレル, オイデニナラレル, オ～ニナラレル (場面114のみで出現) についても, 二重敬語とした。

三重敬語は場面115, 116にのみ現れている。このオミエニナラレルや, 二重敬語のイラッシャラレル, オイデニナラレル, ミエラレルの出現は少ない。

オミエニナルは場面115, 116で1割弱, オ～ニナラレルは場面114で一定数(1割前後)出現した。(2) 共通語的な敬語動詞のイラッシャルは, 場面115と場面116で最も多く使われ, 場面115では, 172例56.2%に達する。改まり度の高い敬語だと考えられる。岡崎にはシャル・サッシャルが直音化してセル・サッセルの形となる伝統敬語形があるが, この場合, 当地では居る(オル)と結合してオラッセルとなることから, イラッシャルは標準語の敬語であると考えられる。

(3) 方言的な敬語動詞のミエルは, 場面116と場面117に多い。友人を話し相手に, 鈴木先生を話題にした場面117ではミエルが尊敬語形式としては最も多く使用される形式である。3場面の

中では、場面 116 で一番多く使われている。なお、場面 115 ～ 117 で用いられるミエル、およびオミエニナラレル、オミエニナル、オミエダ、ミエラレルは、辻 (2014) でも指摘したとおり、「居る」の意味で用いられており、標準語とは意味領域が異なる。

(4) レルは場面 116、場面 115 の順に多く使用され、いずれも 8% 以下にとどまる。場面 117 での使用数は僅少である。ただし、場面 114 では 2 番目に多く使用されていて 3 割程度に達している。

(5) ϕ 形式 (素材敬語なしの形式、ないし、裸の動詞) は、場面 117 で 208 例 (68.0%) と、最も多く使用されている。場面 116 の使用数は場面 115 の倍以上の 56 例 (18.3%) である。

(6) 参考のために示した話し相手待遇の場面 114 では、オ～ニナルが 131 例 (42.8%) とよく使用されている。レルは 90 例使用されており、この場面ではオ～ニナルに次いで多く使用される形式となっている。さらに、 ϕ 形式 43 例、二重敬語形オ～ニナラレル 32 例が続く。

なお、場面 114 のミエル (「かいてみえる」) の用例 [1] は「昔から」「ずーっと」と共起しており、完成相としてではなく、「～ている」の意味で用いられている。

[1] センセ ムカシカラ エ カイテミエテネ ズーット コーヤツテ カイテミエマスカ
マー イー オモイデノ エデ アノ トツテモネー キレーニ カケテマス

ここで、以下の議論を進めるために、回答に現れた敬語形式の敬意度について暫定的ランクづけを行う。表 3 に示した尊敬語形の敬意度を決めるのは難しいが、一応次のように考えることはできよう。(1) 単一敬語より同じ語を含む二重敬語が、二重敬語より三重敬語が敬意度は高い。(2) ミエルの位置づけに関しては個人により異なり、評価に幅があると考えられるが、イラッシャルやオイデニナルのような敬語動詞形よりは敬意度が低い。(3) オミエニナルはイラッシャルやオイデニナラレルよりは敬意度が低い。(4) 二重敬語ミエラレルはイラッシャル等とミエルの中間に位置づけられる。

以上より表 3 に挙げた形式のランクづけの概略を図示しておく。(不等号「>」は左辺の方が右辺より敬意が高いものとする)

敬意高 ← → 敬意低
オミエニナラレル > イラッシャルレル ≡ オイデニナラレル (≡ オ～ニナラレル) > オミエニナル
> イラッシャル ≡ オイデニナル (≡ オ～ニナル) ≡ オイデダ ≡ 御 + 漢語 ≡ オミエダ ≡ オイ
デル > ミエラレル (二重敬語) > ミエル > レル > ϕ

上に示したランクづけを踏まえて表 3 の集計結果を見ると、第三者尊敬表現の三つの場面のうち場面 115 で最も高い形式が選択される結果となっており、場面 116 で少し低い形式が選択され場面 117 では最も低くなっている。すなわち、話題が先生でも話し相手が対等な友人の場合 (場面 117) は、話し相手が先生の場合より相対的に低い形式が選ばれるが (話し相手優先)、話し相手が先生の場合、話し相手より話題の人物の序列が高い場合の方がより高い形式が選ばれる (話題優先)、という結果になっている。

ただし、以上はデータを全体として見た結果であり、個人個人の運用そのものではない。以下、

3.3 で世代別、性別に分けて分類した結果を、3.4 で回答者毎の運用の実態を見ていくこととする。

3.3 第三者尊敬表現場面で用いられた個別敬語形式の特徴

本節では 115 ～ 117 の各場面に現れた敬語形式の世代別使用の実態について検討し、形式毎の特徴について考えていきたい。また、必要に応じて性別で分けた使用実態も検討してみる。

表 4 に場面 115、表 5 に場面 116、表 6 に場面 117 での集計結果を示す。場面 117 については表 7 に性別分類も記す。

以下では、形式毎の使用実態に関して 3.2 の記述に付け加えられる点について見ていこう。

三重敬語、二重敬語の類は 30 代から 60 代の活躍層に多く使用されている。オミエニナルはすべての場面、年代で使用されているが、40 代～ 60 代に多く、場面 117 では 60 代と 70 代の女性に 3 例使用されているだけである。

イラッシャルは、最も多く使用されている場面 115 で、すべての世代でよく使われている。60 代のみ、場面 116 の方が場面 115 より多く使われている。場面 117 で女性の使用が目立って多い。

オイデニナル、オイデダ、御+漢語、オミエダ、オイデルも若年層には使用されておらず、特に伝統的な方言敬語形であるオイデルは、50 代以上にしか使用が認められない。

ミエルは、全年代で使用が認められるが、場面 115、116 では 20 代以下、場面 117 では 30 代以下の使用は少ない。場面 117 では全体的に女性の使用が多い。

レルは、70 代の使用はどの場面でも認められず、60 代以下の世代で使用されている。

表 4 場面 115 【話し手<話し相手<話題の人物】における敬語形式別、世代別使用実態

敬語形式	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	小計
オミエニナルレル (三重敬語)				1		1		2
イラッシャルレル (二重敬語)			2					2
オイデニナルレル (二重敬語)					1			1
オミエニナル (二重敬語)		1	1	6	5	12	4	29
イラッシャル	9	35	35	33	24	19	17	172
オイデニナル				1		3	1	5
オイデダ			1			3		4
御+漢語					2	2		4
オミエダ			3	1	3		2	9
オイデル					1		1	2
ミエル	1		3	3	5	7	9	28
レル			7	7	5	4		23
φ	4	2	3	2	5	3	4	23
NR	1			1				2
小計	15	38	55	55	51	54	38	306

表5 場面 116 【話し手<話し相手>話題の人物】における敬語形式別, 世代別使用実態

敬語形式	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	小計
オミエニナラレル (三重敬語)						1		1
イラッシャラレル (二重敬語)			1					1
オミエニナル (二重敬語)	1	2	2	10	2	6	4	27
イラッシャル	5	24	21	23	15	23	15	126
オイデニナル				2		2	1	5
オイデダ			1					1
御+漢語				1	1			2
オミエダ			1	1	2		3	7
ミエラレル (二重敬語)				1				1
ミエル		3	6	4	15	12	7	47
レル	1	3	7	4	5	4		24
φ	8	5	15	7	11	6	4	56
NR		1	1	2			4	8
小計	15	38	55	55	51	54	38	306

表6 場面 117 【話し手=話し相手<話題の人物】における敬語形式別, 世代別使用実態

敬語形式	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	小計
オミエニナル (二重敬語)						2	1	3
イラッシャル	2		2	8	3	9	10	34
オイデニナル							1	1
オミエダ					1		1	2
オイデル						1	3	4
ミエル		1	1	4	11	14	12	43
レル					1	2		3
φ	13	37	52	43	32	23	8	208
NR					3	3	2	8
小計	15	38	55	55	51	54	38	306

表7 場面 117【話し手=話し相手<話題の人物】における敬語形式別、世代別、性別使用実態

敬語形式	性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	小計
オミエニナル (二重敬語)	男性								
	女性						2	1	3
イラッシャル	男性			1			1	2	4
	女性	2		1	8	3	8	8	30
オイデニナル	男性								
	女性							1	1
オミエダ	男性							1	1
	女性					1			1
オイデル	男性							1	1
	女性						1	2	3
ミエル	男性				1	3	5	6	15
	女性		1	1	3	8	9	6	28
レル	男性					1	2		3
	女性								
φ	男性	8	23	29	26	17	21	8	132
	女性	5	14	23	17	15	2		76
NR						3	3	2	8
小計		15	38	55	55	51	54	38	306

3.4 第三者尊敬表現場面、個人の敬語運用の実態

本節では回答者毎の第三者敬語の運用の実態について検討する。

表8は各回答者が115, 116, 117のそれぞれの場面で選んだ敬語形式の敬意が、相互にどのように位置づけられるかについて分析し、世代別に集計したものである。

各敬語形式の敬意のランクづけについては3.2で示してあるとおりである。

表8 第三者尊敬表現、敬語運用に関わる場面間比較《敬語形式別分類・個人毎の運用・世代別》

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	小計
115 > 116 > 117	1	6	8	3	12	7	2	39
115 > 116 = 117	4	4	12	8	6	3	1	38
115 > 116 < 117	0	0	1	1	1	3	0	6
115 = 116 > 117	2	23	24	26	16	24	5	120
115 = 116 = 117	5	2	4	6	9	12	20	58
115 = 116 < 117	0	0	0	0	1	1	2	4
115 < 116 > 117	2	2	5	8	3	1	4	25
115 < 116 = 117	0	0	0	0	0	0	0	0
115 < 116 < 117	0	0	0	0	0	0	0	0
NR (DK等含む)	1	1	1	3	3	3	4	16
小計	15	38	55	55	51	54	38	306

凡例

- > : 左辺は右辺より敬意が高い。
- = : 左辺と右辺の敬意度は等しい。
- < : 左辺は右辺より敬意度が低い。

なお、場面 117 で尊敬語が使われていない回答（小計）の内訳は以下のとおりであった。

115 > 116 > 117 と示した回答のうち、場面 117 で尊敬語が使われなかったのは 39 例中 34 例。

115 > 116 = 117 と示した回答のうち、場面 117 で尊敬語が使われなかったのは 38 例中 30 例。

115 = 116 > 117 と示した回答のうち、場面 117 で尊敬語が使われなかったのは 120 例中 100 例。

115 < 116 > 117 と示した回答のうち、場面 117 で尊敬語が使われなかったのは 25 例中 19 例。

逆に場面 117 で尊敬語が使われている回答の組み合わせは、115 > 116 < 117, 115 = 116 < 117, 115 = 116 = 117 などである。115 = 116 = 117 と示した回答では、イラッシャルが 26 例、ミエルが 10 例、尊敬語不使用が 18 例などである。このうちイラッシャルの例については 26 例中 23 例が 3 場面いずれもイラッシャルだが、イラッシャル・オイデニナル・イラッシャルの組み合わせ、オイデニナル・イラッシャル・イラッシャルの組み合わせ、ご在宅・イラッシャル・イラッシャルの組み合わせの回答がそれぞれ 1 例ずつあった。

上記以外の尊敬語使用例は、115 > 116 > 117 で 5 例、115 > 116 = 117 で 8 例、115 = 116 > 117 で 20 例、115 < 116 > 117 で 6 例であった。

以上より、場面 117 で尊敬語が使われていない回答の組み合わせとして、115 = 116 > 117 が最も多く、115 > 116 > 117 がそれに次ぐ。場面 117 で尊敬語が使われている回答の組み合わせとしては、115 = 116 = 117 が最も多い。

厳密に言えば、相対敬語的運用にかなっている回答は 115 > 116 > 117 の順で、場面 117 でも尊敬語を使用する、という組み合わせであろうし、丁寧語化していると言える回答は 115 < 116 > 117 の順で、かつ場面 117 で尊敬語も丁寧語も使用しない、という組み合わせだと考えられる。分析の結果、場面 117 で尊敬語使用が多い高年層では、相対敬語的運用が優勢とは言えないし、それ以下の年代で厳密な意味で丁寧語化が浸透しているとは言えない。しかし、場面 115 と場面 116 の差は微妙であるし、どちらも先生を想定するのであるから 115 = 116 が一番多く、回答が錯綜しているのも無理からぬことなのかもしれない。また、115 > 116 の回答が一定数（83 例）あるということは、相対敬語的運用が一部残っているということでもあろう。

このように回答者個人の運用に踏み込んで検討してみると、若干の留保はあるものの、70 代を除いておおむね「敬語体系全体の丁寧語化」に近い運用が行われていると言えよう。

3.5 第三者謙讓表現の使用状況

第三者を対象にした謙讓表現に関する調査項目である場面 118 の集計結果を、表 9 と表 10 に示す。場面 118 では、「この土地の目上の人」を話し相手に、「私の父」を話題の主語として、「すぐ来ますから」のところでどう言うか、を尋ねている。

表9 場面 118〔第三者__謙譲表現〕に現れた敬語形式
《敬語大分類による》

謙譲語+丁寧語	72
V+丁寧語	182
V	24
尊敬語+丁寧語	5
尊敬語	6
その他	4
NR	13
合計	306

凡例 その他：ヨンデマイリマス・ヨンデキマス・ヨビマスカラ・不明（表10についても同様）

表10 場面 118〔第三者__謙譲表現〕に現れた敬語形式
《敬語形式別分類による》

オウカガイスル	1
マイル	71
φ	206
オミエニナル	1
イラッシャル	1
オイデル	1
ミエル	3
レル	5
その他	4
NR	13
合計	306

表9と表10の回答の集計結果をまとめると、概略以下のとおりである。

(1) 丁寧語を用いた回答が圧倒的に多い（259例、84.6%）一方で、素材敬語を使わない回答（φ形式）が206例（67.3%）と多数を占める。謙譲語を用いた回答が72例（23.5%）認められる。用いられた形式はマイルが圧倒的で、オウカガイスルが1例である。

(2) 標準語の規範的な運用では間違いとなる尊敬語の使用（網掛け部分）が僅かだが認められる（11例3.6%）。使用された形式はレル（「来られる」）が半数近くで、ミエルがそれに次ぐ。

以上から、次のように言うことができる。

他人を相手に身内を話題に尊敬語を使用するという回答の率は3.6%にとどまるという結果からは、第3次調査の時点では、相対敬語的運用という標準語の規範に沿った運用がほぼ行われている、と考えられる。

謙譲語の使用も一定程度認められることから、謙譲語が地域言語としてある程度定着している可能性がある。ただし、学歴要因も大きいと考えられる。（学歴（種別）内訳：高等小学校・新制中学校3名。旧制中学校・新制高校22名。旧制高校・専門学校・大学26名。その他21名）

◇補足一場面 113〔市役所〕の経年比較

場面 113〔市役所〕は、父に頼まれて市役所に行くところだということを目上の人に言う、という内容の場面で、もともとは身内尊敬用法、ひいては絶対敬語的運用が行われているかどうかを確認するために設けられた場面だと思われる。筆者は辻(2014)に、この場面で尊敬助動詞レルが多数回答されていることを報告しているが、ここで、改めて第1次～第3次までの調査結果を、回答されたすべての述部形式について、表11に示したい。

表11には、例文[2]のように父親がガ格で現れている回答のみを集計した。父親がニ格やカラ格で現れている場合は、受身のレルだと考え集計していない。

[2] オトツツァンガ シヤクショエ イケ ッテイワレタデ イキマス (第1次調査)

表11 場面 113〔市役所〕：父親が主語(ガ格)の場合に対応する述部の出現敬語形式

	第1次調査 N=429	第2次調査 N=400	第3次調査 N=306
申す	20	1	0
φ	176	26	6
オッシャル	6	0	0
「オ+動詞連用形+ル」形	3	0	0
ミエル	1	0	3
レル	86	14	0
合計	292	41	9

凡例

第1次調査「申す」：モースの他に、モス・申シテオル各1例を含む。

「オ+動詞連用形+ル」形：オ言イル・オ言ル・オ行キルの形で出現。

φ：チュータ、チッタ(以上第1次調査)とッタ(第3次調査)を含む。

集計結果を見ると、調査次毎に、回答数自体に大きなばらつきがあるのがわかる。これは、第1次調査の時は、調査員に父親がガ格となる回答を求めるような指示が徹底していたが、第2次調査時と第3次調査時ではそうではなかったためではないかと推察する。

具体的に見ていくと、第1次調査では、網掛けとした尊敬語を使用するという回答数は、292例中96例(32.9%)とかなりの数にのぼり、調査地の方言的土壌としては身内尊敬用法が行われていたと考えてよいのではないと思われる。この結果は、辻(2014)でも指摘したが、加藤(1973)、井上(2011:302)の記述と異なる。

第2次、および第3次調査では、尊敬語の出現数は少ないが、率としては30%を上回る結果となっている。

以上の結果は半世紀にわたる経年調査が行われたからこそ確かめられたことだと言えよう。

4. 場面 114〔先生の絵〕に現れた敬語の性格分析

前節で二重敬語や三重敬語が、話し相手待遇について問う場面 114 で多く現れたことを述べた。本節ではこの場面に現れた敬語形式の詳細についてさらに検討しておく。

表 12 に第 3 次調査で得られた回答を敬語形式別、世代別に分けて集計した結果を示した。

表 12 場面 114〔先生の絵〕における敬語形式別、世代別使用実態

敬語形式	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	小計
オ～ニナラレル（二重敬語）	1	1	4	8	10	6	2	32
オ～ニナル	4	13	22	20	19	31	22	131
～テミエル							1	1
レル	2	17	16	24	15	12	4	90
φ	8	7	11	3	6	2	6	43
NR ¹			2		1	3	3	9
小計	15	38	55	55	51	54	38	306

¹ NR (No response.) の他、名詞のみの回答、設問に対応していない回答なども含む。(表 13 についても同様)

表 12 を見ると二重敬語形オ～ニナラレルは 30 代から 60 代までのいわば活躍層と言える世代に多く使用されていることがわかる。

この場面で最も多く使用されているのはオ～ニナルであり、尊敬する先生が話し相手であるこの場面では、標準語の敬意の高いこの形式が選ばれやすいことがわかる。

二番目に多く使用されているのは、レルである。その性別に関しては、使用例数を男性：女性の形で示すと、70代 4：0、60代 7：5、50代 7：8、40代 13：11、30代 10：6、20代 11：6、10代 1：1 で、70代で男性だけに使用されているが、あとは男女拮抗した割合になっている。若い世代に向けて標準語的な敬語として再採用されている可能性がある。

この場面 114 は、第 2 次調査でも調査項目に入っている。これらの形式が第 2 次調査でも同程度に現れたかどうかを確認するために、この場面は第三者待遇ではないが、ここで確認しておくことにする。第 2 次調査と第 3 次調査とで出現した尊敬語形式について集計した結果を表 13 と図 3 に示す。

表 13 場面 114〔先生の絵〕に現れた尊敬語形式の経年比較

	第 2 次調査	第 3 次調査
オ～ニナラレル	13	32
オ～ニナル	214	131
御＋漢語	5	0
オ～ナサル	2	0
ナサル	1	0
オカキル	8	0
オカキナル	1	0
カカラス	1	0
ミエル	0	1
レル	85	90
φ	55	43
NR	15	9
合計	400	306

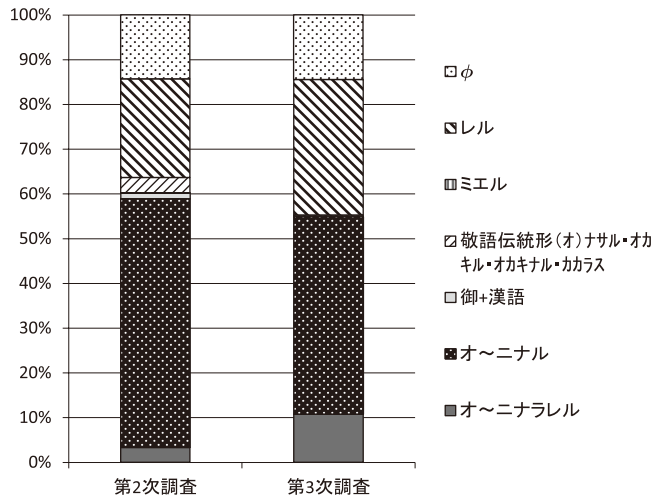


図3 場面 114〔先生の絵〕に現れた尊敬語形式の経年比較（有効回答のみ）

表 13、図 3 から、二重敬語であるオ～ニナラレルの形式が、第 2 次調査から第 3 次調査の間に 13 例 3.4% から 32 例 10.8% と 3 倍以上増えていることがわかる。

オ～ニナルは減少しているが、オ～ニナラレルの増加分でいくらか相殺できるようにみえる。その他の形式に関しては、レルが少し増加し、φ形式がほぼ横ばいとなっている。また、レル以外の伝統的な方言敬語形（オ～ナサル・ナサル・オカキル・オカキナル・カカラス）は、第 2 次調査で 13 例あったが、第 3 次調査では 1 例も現れていない。

二重敬語の増加は、辻（2014）で示した「敬語形式の重層化」を確認できる事例だと言えよう。

5. おわりに

以上により、第 3 次岡崎敬語調査の第三者尊敬表現と第三者謙譲表現に関する設問に対する回答のデータを中心に、岡崎市における第三者敬語の体系的、地理的位置づけについて検討した結果をまとめると、次のようなことが言える。

(一) 第三者尊敬表現に関しては、目上の人物である先生を話題にして、対友人場面で尊敬語を使わず、対先生場面で尊敬語を使うという回答が多数を占めた。世代別に見ると、若い世代にかけてこの傾向が強まる。この対友人場面では、それでもなお尊敬語が 3 割程度用いられるが、世代別に分析すると年齢の高い世代、性別では女性に偏る傾向があった。この結果から、見かけ時間の変化ではあるが、尊敬語の対者敬語の使用（敬語体系全体の丁寧語化）への変化が進んでいると言える。

ただし、話し相手と話題ともに上位者、具体的には先生を設定した場面では、回答が分かれ、話題と話し相手との双方を考慮した回答が一定数認められた。これは相対敬語的用法と言える。

(二) 「第三者謙譲表現」場面のデータには、他人を話し相手として身内の父親に言及する際、尊敬語使用はごく少数しか認められなかった。この結果から、第 3 次調査の時点では、身内尊敬用

法がほとんど行われていないことがわかった。他方、第1次調査の別の項目の分析結果から、その調査時点では身内尊敬用法がかなり行われていることが認められるので、この点でも身内尊敬用法が廃れるという方向への変化が認められることになる。

(三) 第三者待遇で用いられる尊敬語は相手により、話題により、多様な形式が用いられる。三重敬語や二重敬語、敬語動詞、ミエル、オイデル、レルなどである。このうちミエルは話し相手が友人の場合に第三者敬語として、最も多く使われる形式であった。二重敬語は話し相手待遇と、第三者待遇の話し相手と第三者ともに上位の場面で一定程度使用されていた。第三者待遇のうち、上位の相手に、さらに上位の人物を話題にする、という場面の方がより多かった。三重敬語もその場面で現れた。

(四) 二重敬語は話し相手待遇(114 [先生の絵]) 場面で多く現れたが、この場面について第2次調査と第3次調査で比較してみると、3倍近い増加が認められた。これは「敬語形式の重層化」(辻 2014) を示す一つの事例だと考えられる。

(五) 岡崎市の敬語の地理的位置づけ、という観点から見ると、敬語の運用上の特徴は、相対敬語的とみられる運用も一部に残しつつ、身内に関しては身内尊敬用法のような、西日本的な絶対敬語的運用を残す運用や、くだけた場面でも尊敬語を使用する用法⁶から、東日本的な敬語体系全体の丁寧語化のような運用に変わりつつある。

また、近畿中央部由来の尊敬語伝統形の衰退のような語形の変化よりも、丁寧語化のような運用の変化が、遅れていることもわかった。

参考文献

- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987 [1978]) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chambers, J. K. (1995) Accents in time. *Sociolinguistic theory*, 146-206. Malden, Massachusetts: Blackwell.
- 彦坂佳宜 (1991) 「東海西部地方における尊敬語の分布と歴史—『あなたはどこに行くのか』を例に—」『国語学』166: 22-33.
- 井上史雄 (1981) 「敬語の地理学」『國文學 解釈と教材の研究』26(2): 39-47. 東京: 學燈社.
- 井上史雄 (1991) 『東海道沿線方言の地域差・年齢差 (Qグロットグラム)』(語研資料 13) 東京: 東京外国語大学 語学研究所.
- 井上史雄 (2011) 『経済言語学論考—言語・方言・敬語の値打ち—』東京: 明治書院.
- 加藤正信 (1973) 「全国方言の敬語概観」林四郎・南不二男 (編) 『敬語講座 6 現代の敬語』25-83. 東京: 明治書院.
- 菊地康人 (1994) 『敬語』東京: 角川書店.
- 金田一京助 (1959) 『日本の敬語』東京: 角川書店.
- 国立国語研究所 (編) (2006) 『方言文法全国地図』第6集 東京: 財務省印刷局.

⁶ 今回の分析では、友人を話し相手に、先生を話題の主語とする場面で、尊敬語を用いるとする回答が高年齢層に多かったというところまでしか明らかにできなかった。しかし、岡崎市の記述調査の結果、西尾 (2010) では、話し相手が友人か配偶者で、話題の第三者が上位の人物の場合、尊敬語を用いるとする回答 (話者は1939年生まれ男性) が複数の質問についてあったことを明らかにしている。また、辻 (2010) では、同じく記述調査で、1920年生まれ女性の、娘を話し相手とする談話資料を分析した結果、上位から近所の人までを話題にして、方言伝統形の敬語を使用していることを明らかにしている。当地では、もともと、くだけた場面でも話題の主語に尊敬語を使用する用法が浸透していたと推察される。ただし、下向きの素材待遇語は確認できていない。この点は近畿方言の敬語と異なる点だと考えられる。

- 宮治弘明 (1987) 「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151: 38-56.
- 宮地裕 (1971) 「敬語論」『文論—現代語の文法と表現の研究 (一)—』東京：明治書院.
- 西尾純二 (2010) 「資料1 記述基幹調査のデータ例」西尾純二・辻加代子・久木田恵 (編) 43-57.
- 西尾純二・辻加代子・久木田恵 (編) (2010) 『敬語と敬語意識—愛知県岡崎市における第三次調査—』平成19年度～平成21年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書 第4分冊 記述調査編.
- 辻加代子 (2009) 『「はる」敬語考 京都語の社会言語史』東京：ひつじ書房.
- 辻加代子 (2010) 「第3章 高年層女性話者の敬語体系と言葉の切換え—自然談話分析による記述の試み—」西尾純二・辻加代子・久木田恵 (編) 15-31.
- 辻加代子 (2014) 「岡崎市方言敬語伝統形式および新形式ミエルの消長—継続サンプルの分析より—」『国立国語研究所論集』7: 265-287. 東京：国立国語研究所.
- 辻村敏樹 (1963) 「敬語の分類について」『国文学 言語と文芸』5(2): 8-13.

Positioning of Third Person Honorifics in Okazaki

TSUJI Kayoko^a INOUE Fumio^b YANAGIMURA Yu^c

^aKobe Gakuin University / Project Collaborator, NINJAL

^bEmeritus Professor, Tokyo University of Foreign Studies /

Invited Professor, Department of Language Change and Variation, NINJAL

^cAdjunct Researcher, Department of Language Change and Variation, NINJAL

Abstract

This paper aims to examine the positioning of third-person honorifics in Okazaki, focusing on data obtained from responses related to third-person honorific expressions that were newly added from the third Okazaki Survey on Honorifics conducted in 2008. The results of this study answered the following question.

What kinds of gradations exist within the honorific language system in the city of Okazaki? The following gradations were found in this study: First, the results of the analysis indicated that an evolution of respectful honorifics toward polite (addressee) honorific usage is ongoing, although there is a change in apparent time. However, in a setting wherein both one's conversation partner and the person who is the topic of conversation are established as being high-ranking people, certain extent of answers can be regarded as relative honorific usage.

Second, for the data on scenarios involving "third-person humiliating expressions," the usage of only a few respectful honorifics was observed when referring to a speaker's father with another person as the conversation partner. This result clarified that a change toward relative honorific usage from absolute honorific usage has been identified in this regard.

From the perspective of the geographical positioning of honorific language in Okazaki, the usages, characteristic in western Japan, which remain absolute honorifics, and broad respectful honorifics that are used in reference to third parties, still in casual settings, have indicated a decline. Instead, the usage trend is shifting toward an honorific system entirely comprising addressee honorifics, a characteristic of eastern Japan.

Key words: third person honorifics, respectful honorifics, humiliating honorifics, shift toward an honorific system of entirely polite honorifics, relative honorific usage